

シニツク 眠り』

雪と氷に刻まれた「記憶」

厳冬のオホ・ツク海を埋め尽くす流水は、内に秘めたる過去を載せての長い旅路の果てに流水の街、網走の沖合にその姿を現わす。透明な水が凍ってできる雪や氷は、時として過去の瞬間とその時の何かを刻み込んで現在へと届けてくれる自然からの使者となる。流水や氷山そして雪の結晶などがそれであり、それも融ければ過去の記憶が全て抹消されてしまうという気温のハ・下ルツきの生き残った白い使者となる。

いまの季節、流水はオホ・ツク海のサハリン北端の岬付近から生まれ始める。シベリヤを流れる大河アムールの淡水が、大陸と千島列島の島弧で囲まれた内海のようなオホ・ツク海に大量に注ぎこまれ、厚さ五〇センチほどの塩分の薄い凍りやすい層とその下の濃い層との二重構造を作りだす。シベリヤ寒気の吹き出しとともに凍った無数の小氷片がグリ・ス状となって波間に漂い、蓮葉氷となり次第に大きな氷盤へ成長していき、風と海流で流されて流水となる。

流水にはフラインと呼ばれる、真水だけが凍って濃縮塩水が凍らずに細い管の中に取り残されている。故郷の塩水をフラインというタイムカプセルに閉じ込め、シベリヤ陸を起源とした雪解け水が凍った流水は、そのふるさとの記憶を載せながらおよそ千キロ、ふた月の旅の

果てにオホ・ツ沿岸の流水の街に押し寄せ、春の終わりとともに消えていく。

流水を融かせばフラインの中の濃縮塩分で海水の三分の一ほどの濃さの塩水となるが、氷山は真水の塊である。グリ・ンランドや南極大陸に降り積もった雪が大陸氷となって海に押し出され分離してきたもので純水に近い。氷山水のオンザロックのグラスを耳に近づけると、プチンプチン、チリンとなんとも涼しげな小さな音が聞こえてくる。降り積もった雪が層をなし、当時の空気が押し縮められ極微の気泡カプセル、空気の化石」となって封じ込められている。

プチンチリンは、融けた氷の表面で押し縮められていた気泡の破裂であり、過去の記憶が開放された叫びでもある。二万年ほど前のタイムカプセルの扉をオンザロックでこじ開けて、飛び出した当時の新鮮な空気を吸うことになるが、微量で鼻まで届かないかもしれない。氷河や氷の大陸をボリ・ンダすると年輪を刻み込んだアイスコアが得られ、気温と二酸化炭素の組成がわかる。すでに深さ二千メートル、二六万年前までは解明されており、さらに深く掘り進んでいるので二〇万年前まで遡るのももう夢でない。

白い雪面には強風で削り取られた凸凹状のサスツルギが見られ、卓越風の方向がわかり、冬山の稜線には雪ヒが風下側に伸びて鋭く切れ、風上側に遡るように伸びる樹氷の奇妙な造形は、無数の過冷却水滴の存在とその風の方向をまるで記憶しているようだ。雪は天からの手紙、文

面に結晶という字で書かれている。最もポピュラーな六華の結晶から極微の六角形の氷板や角柱、砲弾形や鼓形の結晶といった具合に千差万別で、高度数キロ、数分から数十分程度の上空の気温や湿度、過冷却度などの記憶を刻み込んで落下してくる。

数十分程度から二時間程度の寿命を持つ大きな積乱雲からの急激な下降流の存在は、大粒なアラレやヒヨウの急落下というシナリオが描かれ、雷雲は上空でマイナスイオン数度付近を境にアラレの電荷が変わり、振るい分け作用で雲底と雲頂に分けられ放電している有様を推し測ることが出来る。台風襲来の前兆といわれている燃えるような夕焼け」は、頂きから吹き出されたごく低温の微細な氷晶が巻雲となって遠く離れたところまで広がり夕陽に燃え輝いたのである。さらに地球規模の風と雨が演出するアジアモンスーンは、チベット高原の前年の積雪の広がりや履歴として残っていると考えられている。

北グリーンランドでは、距離がシニツク「眠り」という単位で計られていたという。目的地までの距離を旅に必要な夜の眠りの回数として数える方法である。途中で嵐に遭って沈殿するかもしれない。シニツクは季節でも目的地までのコースの選択でも異なるのに構わないの自然体で距離でもない回数という時間でもない、空間と時が自然に溶けこんでしまっている時空の概念なのである。数分から二〇万年ほどの悠久の時

間を遡り、極微の雪の結晶から雷、流水とブライン、雪から変わった氷と空気の化石である気泡といったように、雪と氷が折りなす過去からの自然の使者に、時間と空間が溶け合った白い眠り、『フニック』のような感覚を感じてしまう。それも融ければ全て過去の記憶が抹消されという、時の断絶を含みながら時空間が溶け合った、そんな不思議なドラマを見ているようである。